ラーフェンスブリュック強制収容所のスペイン人女性亡命者

砂　山　充　子

はじめに

“私のこれまでの経験、苦難は人生の糧となっている。”パリの北にあるコンピエーニュ収容所から、各国の女性を収容する絶滅収容所のラーフェンスブリュックまでの昼夜 5 日間の運命的な旅の間、私は自分にこう言い聞かせていた。

マイナス 22 度。1944 年 2 月 3 日、午前 3 時、フランスの刑務所や収容所からの 1,000 名の女性がラーフェンスブリュックに到着した。27000 輸送集団と呼ばれ、いまだにその名前で知られている収容者の一団だ。1,000 名の中にはフランスに居住もしくは避難していたチェコ人、ポーランド人、そしてスペイン人のグループがいた。[1]

これはラーフェンスブリュック強制収容所から生還したスペイン人女性、ネウス・カタラー（Neus Català）の言葉である。ベルリンの北方約 90 キロメートルにあり、気候条件の厳しさから「メクレンブルグの小さなシベリア」[2]と呼ばれる場所にナチドイツのラーフェンスブリュック強制収容所があった。ネウスとともにラーフェンブスリュックに収容されたスペイン人女性たちは、

---

[1] CATALÀ,Neus:*De la resistencia y la deportación:50 Testimonios de mujeres Españolas*, Barcelona,L'eina,1984.p.15.

[2] Amigos de Ravensbrück y Asociación de Deportadas e Internadas de la Resistencia: *Mujeres bajo el nazismo*, Barcelona, Editorial Fontanella, 1966, p.9. 同書はラーフェンブスリュックについての多くの研究の原典の一つとなっている *Les françaises à Ravensbrück*, Gallimard, Paris, 1965. のスペイン語訳である。

その多くがスペイン内戦での敗北の結果、ピレネーを越えてフランスに亡命[3]していた女性たちだった。

1936 年 7 月にスペイン領モロッコでの軍人による共和国政府に対する反乱に始まった蜂起は、スペイン全土に広がり、1939 年 4 月のマドリード陥落まで、3 年にわたる同胞同士の戦いであるスペイン内戦となった。1939 年 1 月 26 日、共和国陣営の拠点の一つ、バルセローナが陥落し、共和国陣営の敗北が濃厚になると、共和国を支持していた人々はスペインをあとにし始めた。翌 27 日、フランスとの国境が開かれ、カタルーニャからピレネーを越えてフランスへと亡命する人々の流れが続いた。この頃、465,000 名ほどが国境を越えたとされる。国境を越えると、男性と女性・子供が別々にされ、トラックや列車で避難場所へと連行された。野営地のような場所もあれば、体育館や元工場、元監獄の場合もあった。収容所としてはギュール（Gurs）、アルジェルス・シュル・メール（Argelès-sur-Mer）、サン・シプリアン（Saint Cyprien）などがあった。1939 年 2 月中旬の時点でフランスの収容所には約 275,000 名のスペイン人がいた[4]。厳しい状況に耐えきれずにスペインに帰国した人もいたし、乗せられた列車が知らないうちにスペインへと向かっていたというケース[5] もあった。帰国するのが嫌で途中で電車から下車したり[6]、送還される電車から飛び降りて命を失った人々もいた[7]。

南西フランスの収容所の抑留者のうち、一部の人々はフランスから第三国へ再移住することが出来た。スペインからの避難民の受け入れを表明したの

---

[3] 本稿では「亡命」という言葉を、政治的な理由から帰国すると弾圧を受ける可能性がある人々という意味で使用する。今回取り上げる女性たちの中には内戦以前にフランスに「移民」していた両親から生まれたフランス生まれの人々も含まれている。また、1939 年に共和国陣営の敗色が濃厚になってから国境を越えた人々は当初は「亡命者」ではなく「避難民」だったとも言える。

[4] ALTED Alicia, DOMERGUE, Lucienne (coordinadoras): *El exilio republicano español en Toulouse 1939-1999*, Madrid, UNED, 2003, p.32.

[5] ロサ・ラビーニャの証言、RODRIGO, Antonina: *Mujer y exilio 1939*, Madrid, Compañía Literaria, 1999, p.215.

[6] ドロレス・カサデージャの証言。
http://www.depardocreative.com/web_censo/fichas/ficha_casadella.html（アクセス日　2012 年 11 月 6 日）

[7] カルメン・ブアテルの証言。CATALÀ, Neus: *De la resistencia y la deportación: 50 Testimonios de mujeres españolas,* Barcelona, Adgena, 1984, p.79.

は、ロシア、メキシコ、チリ、ドミニカ共和国だった[8]。亡命者のその後の人生は行き先によって大きく変わる。一番幸せだったとされるのは、中南米諸国、とくにメキシコに亡命した人々だった。メキシコは内戦中、ソ連と並んで共和国政府を援助した国だった。当時のメキシコ大統領ラサロ・カルデナス（Lázaro Cardenas）はスペインからの亡命者を暖かく迎え入れた。メキシコへの亡命者には多くの知識人が含まれていた。内戦中から移住は行われていた。戦闘が激しくなった中、1937 年に集団でメキシコに渡った子供たち[9] もいた。彼らの手助けをしたのは、ラサロ・カルデナスの妻アマリア・ソロルサノ（Amalia Solórzano）だった。同じスペイン語圏ということで、少なくとも言語面での障壁はなかった。北部のバスク地方からは幼い子供たちがイギリスやベルギーなどに疎開した。共産党を支持していた人々は子供をソ連に送った。そうした子供たちの一部はその後もずっとソ連に残った[10]。

1939 年、ヨーロッパは再び戦場となる。多くの人々が身を寄せていたフランスはナチの占領下におかれる。ファシズムのスペインから逃亡した人々にとっては皮肉な運命であった。在仏スペイン人はスペインに帰国するか[11]、第三国に行くか、フランスに残るかの選択を迫られることになった。

本稿で取り上げるのは、フランスに残るという選択をしたスペイン人女性である。フランスで対独レジスタンス運動に身を投じたり、南フランス、特にトゥルーズなどからスペイン国内の地下活動を援助していた女性がいた。

---

8 PLA PRUGAT, Dolores: “El exilio republicano en Hispanoamérica, su historia e historiagrafía”, en *Historia Social*, núm. 42, 2002, p.100.
これらの国々へ亡命したスペイン人は、1939 年 2 月以降から 39 年末までの数字としてメキシコ 7500 名、チリが 2300 名、ドミニカが 3100 名だった。その他、アルゼンチン、ベネズエラ、コロンビア、キューバに 2000 名ほどが亡命したという。DREYFUS-ARMAND, Geneviève: ”El exilio republicano en Francia”, en *Exilio,* Madrid, Fundación Pablo Iglesias, 2009, p.182.

9 この子供たちは受け入れた町の名前を冠して「モレリアの子供たち」（Niños de Morelia）として知られる。戦争孤児や兵士の子供たち 456 名が 1937 年にフランス船でメキシコに渡った。

10 ただし、ソ連が内戦後に受け入れたスペイン人は戦争中に移住した人々を除くと、1000 名に満たないという。A. ALTED, L.DOMERGUE: *op. cit.*, p.37.

11 第二次世界大戦の勃発により、約半数の在仏スペイン人が帰国した。CUESTA, Josefina: “Las mujeres en las Migraciones Españolas Contemporáneas”, en *Anales de la historia contemporánea*, núm.24, 2008, p.42.

スペインでは 1939 年 2 月 9 日に制定された政治責任法（la Ley de Responsabilidades Políticas）により、亡命者たちはスペインに帰国することはできなかった。同法第 2 項では内戦で共和国軍を支持したあらゆる勢力が弾圧の対象となっていた。内戦後、フランコ政権の代理人たちはフランスの収容所で、帰国しても弾圧されることはないと触れ回り帰国を促したが、多くの人々は帰国を拒否した[12]。

戦禍、弾圧から逃れて、フランスに亡命した女性たちをあらたな運命が待ち受けていた。ナチドイツによるフランス占領である。少なからぬスペイン人たちが、占領下のフランスでレジスタンスに参加していた。亡命したスペイン人はフランス南西部でマキ（maquis）[13] として抵抗運動にかかわっていた。女性たちはマキたちを自宅に匿ったり、連絡係として重要な役割を果たしていた。そうした活動に関わっていた女性たちの何人かは逮捕、投獄され、強制収容所送りとなった。

スペイン人が収容された強制収容所として、オーストリアのリンツ近郊のマウトハウゼン（Mauthausen）が知られている[14]。最も厳しい「第三カテゴリー」[15] の収容所であったマウトハウゼンには約 8,000 名のスペイン人が収容され、そのうち生還したのは 1,500 名ほどにすぎない。「927 輸送集団」というグループでマウトハウゼンに移送された人々の場合には、家族全員が一旦収容所まで送られ、その後、女性と子供はスペインへと送還された[16]。

---

[12] 1969 年の恩赦法により、若干緩和はされたものの、政治リーダーに対する権利の剥奪など差別や弾圧は 1975 年のフランコの死まで続いた。

[13] マキとは繁茂した雑木林が語源で、そうした雑木林の間で隠れて活動をしていたレジスタンスのことを指す。

[14] マウトハウゼン収容所に収容されたスペイン人については以下を参照。ROIG, Montserrat: *Noche y Niebla: Los catalanes en ls campos nazis*, Barcelona, Ediciones Península, 1980., PIKE, David Wingeate: *Españoles en el Holocausto: Vida y muerte de los republicanos en Mauthausen*, Barcelona, Del Bolsillo, 2006.

[15] 第三帝国保安長官ハインドリヒによって定められカテゴリーで、第 1 カテゴリー（高齢者など比較的軽い労働への従事）、第 2 カテゴリー（重い罪科を負わされつつ、改心の可能性のある囚人の収容）、第 3 カテゴリー（頑な犯罪者、反社会分子、再教育の見込のない抑留者など）に分かれていた。マルセル・リュビー著、菅野賢治訳『ナチ強制・絶滅収容所』筑摩書房、1998 年、69 頁。

[16] ARMENGOU, Montse, BELIS, Ricard: *El convoy de los 927*, Barcelona, Plaza & Janés, 2005, pp.181-188.

ル・シェーヌによれば、この時収容された男性たちの家族がラーフェンスブリュックに送られたという生還者からの話もあるという[17]。ラーフェンスブリュック以外の収容所に収容されていたスペイン人女性たちの存在も何名か確認できた[18]。

本稿の目的は、亡命スペイン人研究からも強制収容所やホロコースト研究からも看過されてきたフランスに亡命したスペイン人女性[19] について、これまでの研究成果をまとめ、彼女たちの実態を明らかにすることである。

1　ラーフェンスブリュック収容所

ラーフェンスブリュック収容所は、女性を収容するために 1939 年初頭にフェルステンベルク湖に隣接した場所に建設された。様々な国籍の女性が収容されていたラーフェンブスリュックとはドイツ語で「カラスの橋」を意味する。ネウスが言うように「火葬場から立ち上る煙の匂いにつられてカラスが沢山飛来した」[20] ということだろうか。

---

[17] Le CHENE, Evelyn: *Mauthausen The history of a death camp*, London, Corgi Edition, 1973, p.110.

[18] 例えば、スリタ・クエンカ（Francisca ZURITA CUENCA）は 1941 年 1 月 27 日から 6 月までマウトハウゼンに収容され、その後移送されたグーセン付属キャンプで死去した。ルイス・サンチェス（Paz RUIZ SÁNCHEZ）も 1941 年 1 月 24 日からマウトハウゼンに収容され、その後 2 月にグーセンで死去している。
BERMEJO, Benito, CHECA, Sandra: *Libro memorial: españoles deportados a los campos nazis (1940-1945)*, Madrid, Ministerio de Cultura, 2006, p100, p.204.
その他に強制収容所ではないが、アルジェルス、サン・シプリアンに収容されていて、後にスイス人女性がスペイン人亡命者のために設置した出産院で出産したレメディオスは回想録を残している。OLIVA BERENGUER, Remedios: *Éxodo Del campo de Argelès a la maternidad de Elna*, Barcelona, Viena Ediciones, 2006.　ポン・ラ・ダムという小さな収容所にいたフランシスカはトゥルーズ大学スペイン語学科に提出した論文で自らの経験を語っている。MUÑOZ ALDAY, Francisca: *Memorias del exilio*, Barcelona, Viena Ediciones, 2006 として出版されている。

[19] これまで亡命スペイン人についての研究はかなりの蓄積がある。特にメキシコに亡命した女性についてはドミンゲスの先駆的研究がある。DOMÍNGUEZ, Pilar: *Voces del exilio Mujeres españolas en México 1939-1950*, Madrid, Comunidad de Madrid, Dirección General de la Mujer, 1994, *De ciudadanas a exiliadas. Un estudio sobre las republicanas españolas en México*, Cinca, Madrid, 2009.

[20] CATALÀ, Neus: *op. cit.* p.15,. ROIG, Montserrat: *op. cit.*, p.65.

1939 年 1 月から 5 月までに監視塔、高電圧鉄条網の柵、16 棟の収容所が建設され、その他に男性用の収容施設も建設された。隣接した場所には SS の住居があった。その後、3 度に渡って増築が行なわれ、最終的には 32 棟を有する収容所となった。他の収容所同様、オフィス、倉庫、作業場が建設され、1945 年にはガス室も設置される[21]。

ラーフェンスブリュックは、当初、反ナチ運動を行なった政治犯を再教育するための収容所であった。1939 年 5 月 18 日に 860 名のドイツ人女性と 7 名のオーストリア人女性が収容された。収容者の多くは反ナチ運動に身を投じた政治犯だったが、ナチへの忠誠を誓わなかったエホバの証人（聖書研究派とも呼ばれる）[22] の人々も含まれていた。1941 年以降、様々な国籍の女性が収容されるようになり、収容者の国籍は 40 ヶ国以上になった。1939 年 5 月から 1945 年 4 月 30 日に解放されるまでの間にラーフェンスブリュック収容所には、132,000 名の女性と子供、20,000 名の男性、1,000 名の少女が収容された[23]。132,000 名の内訳は、48,500 名がポーランド人、28,000 名がロシア人、24,000 名がドイツとオーストリア人、8,000 名がフランス人で、イギリス人やアメリカ人、イタリア人[24] も収容されていた。ユダヤ人は全体の約 20 パーセントだったと推定されている[25]。

---

[21] Amigos de Ravensbrück y Asociación de Deportadas e Internadas de la Resistencia: *Mujeres bajo el nazismo,* pp.11-12.

[22] エホバの証人はナチへの忠誠を誓うというサインさえすれば、すぐに出所できたが、そうする人は少なかった。エホバの証人の収容所内部での様子については　マルガレーテ・ブーバー・ノイマン『スターリンとヒットラーの軛のもとで』ミネルヴァ書房、2008 年、245～268 頁参照。

[23] “Campo de concentración de mujeres de Ravensbrück”, en http://www.ravensbrueck.de/mgr/index.html（アクセス日 2012 年 11 月 12 日）ラーフェンスブリュック強制収容所のホームページである。
Del HOYO, Teresa: *Ravensbück: camp de contentració per a dones,* Barcelona, Amical de Ravensbrück, 2009, p.12.

[24] イタリア人女性の回想録として以下のものがある。MASSARIELLO ARATA, Maria: *Il ponte dei corvi, Diario di una deportada a Ravensbrück*, Milano, Mursia, 2005

[25] “Ravensbrück Concentration Camp”, http://www.jewishvirtuallibrary.org/jsource/Holocaust/Ravensbruck.html（アクセス日　2013 年 12 月 1 日）
ポーランド人生還者の Wanda Kiedrzynska の調査ではユダヤ人の割合は 15,1%である。これは 25,028 名の拘留者についての分析であるが、モリソンはこの数字が実態に近いのではないかという。MORRISON, Jack, G., *Ravensbrück, Everyday Life in a*

ラーフェンスブリュックには、ユダヤ人だけでなく、ナチに批判的で同調しなかった女性たち、シンティ、ロマ、同性愛など「反社会的」とされた女性、犯罪者などが収容されていた。

開設された当初、収容所内は清潔が保たれ、生活環境はさほど劣悪ではなかった。ベッドも一人 1 台ずつ与えられ、 シーツは 2 枚、自分の荷物を収めるための荷物入れもあった[26]。食事も時にはごちそうや白いパンが供されることもあった。収容者たちは「再教育」のために一日中、無意味な労働に従事させられた。無意味な労働とは、例えば、盛り土を一カ所から別の場所に移し、終わったら再び元の場所に戻すといったような労働である[27]。

1939 年 8 月から 9 月にかけて、多くのロマがやってくる。1940 年にはオーストリア、チェコ、ポーランドなどからの移送が続き、10 月になると、収容者は 1 万名ほどになった。1941 年にはオランダやノルウェーからの収容者が到着し、またユダヤ人やエホバの証人などが収容された[28]。

次第に収容所の性格が、社会的危険分子の「再教育」といった側面から、ナチドイツの労働不足を補う労働力供給源へと変化する。SS は反社会分子の「再教育」が自分たちにとって、よい収入源となることを「発見」したのである。収容所の隣にはジーメンス（Siemens & Halske）社の工場が 20 棟建設された。縫製工場なども併設され、収容者たちは軍服の縫製などに携わった。ラーフェンスブリュック収容所内部での労働に従事させられる場合と、外部の労働キャンプ（サブキャンプもしくは衛星キャンプと呼ばれる）に出かけて行くケースがあった。1942 年 4 月 30 日には回覧状で、生産性向上のために労働力は最大限に活用するように、労働時間短縮につながるような行為は禁止するようにと伝えられ、一日あたりの労働時間は 12～14 時間となる[29]。

Women's Concentration Camp 1939-45, Markus Winter Publishers, Princeton, 2000, p.87.

[26] Amigos de Ravensbrück y Asociación de Deportadas e Internadas de la Resistencia, *Mujeres bajo el nazismo*, p.13.

[27] MARTÍ,C., *op. cit.*, p.141.

[28] Amigos de Ravensbrück y Asociación de Deportadas e Internadas de la Resistencia, *op. cit.*, pp.13-26.

[29] *Ibid.*, p17

1941 年の冬からは収容者の殺害が始まる。労働が可能かどうかの「選別」が行なわれ、労働に従事できない病人や高齢者は生きのびることができなかった。この頃、1600 名がデッサウ近くのベルンブルクでガス殺された。春になると長時間に及ぶ点呼中にも銃殺が行なわれるようになった。またその後も何度か「黒の輸送隊」という名前で、拘留者たちがガス殺されるために他の収容所に運ばれていった。

収容所には「ユーゲントラーガー（Jugendlagar）」[30] と呼ばれる収容区があり、労働に従事できない女性たちを処刑する場所として機能していた。そこに送られたらほとんど戻ってくることはできなかった。スペイン人のリタ・ペレス・マルティネス（リスト 78）はユーゲントラーガーに送られたものの戻る事ができた。リタの証言によればスカートをめくり上げさせられ、足がむくんでいた人たちは殺されたという[31]。

連合軍による工場爆撃が続くと、強制労働の需要も減っていく。そうなると、支出の削減が急務となる。当然、利益を生み出さない労働に向かない弱者は切り捨てられる。ラーフェンブスリュックで収容者たちは強制労働に従事させられた。高齢者や病人など労働に不適格な人々は次々と姿を消していった。Mittwerda という実際には存在しなかった「収容所」へ送られたり、こうして、ラーフェンスブリュックは「絶滅収容所」へと変化していった。

1943 年はじめには 18,000 名の収容者がいて、収容所の住環境も劣悪なものになっていった。75 センチ幅のベッドに週日には 2 名が、夜勤のない日曜には 4 名が寝る事になった。その後、さらに収容人数が増え、ベッドも足りなくなり、藁を敷いただけの床も寝床となった。衛生状態も悪化していく。衛生状態が悪化すると、感染症も増加し、死亡率も上がる。1943 年 4 月 23 日には死体焼却炉が稼働し始めた[32]。

---

[30] 青少年収容区という意味。1940 年から 43 年までは、ヒトラー・ユーゲントの非行少女たちを収容して再教育する場であった。しかし、1944 年に少女たちを追い出して、高齢者、障がい者などを収容することになった。リュピー、前掲書。224–225 頁。

[31] http://www.depardocreative.com/web_censo/fichas/ficha_perez.html（アクセス日 2012 年 10 月 25 日）

[32] Amigos de Ravensbrück y Asociación de Deportadas e Internadas de la Resistencia, *op. cit.* p.23.

1944 年 12 月には 150 名程度を収容するガス室が設置され、解放直前まであらゆる形での殺害が続いていく。1945 年 1 月末から 4 月までにガス室送りになった人は 5,000 とも 6,000 名とも言われている。1939 年に最初の収容者が収容されてから、1945 年 4 月 30 日の解放まで、ラーフェンスブリュックでは約 92,000 名が命を落とした。ガス殺、毒殺、絞首刑などで殺害された人もいれば、チフス、赤痢など病死や、栄養不足からの餓死者もいた。整地ローラーで圧死したり、絶食させられ凶暴になった犬にかみ殺された人もいる。

２　収容所での生活

収容所での生活については、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、英語など様々な言語で書かれた回想録で語られている[33]。回想録という性格から、語られる内容は様々で、どの時期にどういった状況で収容されたかによって状況もかなり異なってくる。

カタルーニャのテレビ局のジャーナリストのアルメンゴウとベリスは収容所の生き残りの女性たちにインタビューをして番組を制作した[34]。インタビューにはスペイン人のネウス・カタラー、メルセデス・ヌニェス・タルガ

---

[33] 邦語文献としては、シャルロッテ・ミュラー著、星乃治彦訳『母と子のナチ強制収容所−回想ラーフェンスブリュック』青木書店、1989 年がある。本書は共産党員だったシャルロッテ・ミュラーの回想録の抄訳である。また、マルセル・リュピー著、菅野賢治訳『ナチ強制・絶滅収容所　18 施設内の生と死』筑摩書房、1998 年にはラーフェンスブリュックについての 1 章がある。この他に元収容者の著作として Germaine Tillion, *Ravensbrück*, Garden City, NY, Anchor Press, 1975.がある。ティヨンは民族学を修めた学者で、彼女の著作は回想録というよりも研究書のような体裁を取っている。後の多くの研究が彼女の著作に拠っている。また、ラーフェンスブリュックに収容されていたユダヤ人女性への聞き書きをまとめたものとして、SAIDEL, Rochelle G.: *The Jewish women of Ravensbrück Concentration Camp,* Wisconsin, Univ. of Wisconsin Press, 2004.がある。

[34] 放映された番組は以下のページで視聴出来る。
http://www.euscreen.eu/play.jsp?id=EUS_948DF95F7C5A4DE3A688CAC17BA44DF1 また番組をもとにした本が出版されている。ARMENGOU, Montse, BELIS, Richard: *Ravensbrück: El infierno de las mujeres*, Barcelona, Belacqva, 2008.

（Mercedes Núñez Targa）[35] の他にライズ・ロンドン（Lise London）[36]、イギリス人の看護婦、フランス人でレジスタンスに参加していた女性、チェコのユダヤ人、ポーランド人でレジスタンスに参加した女性、ドイツ人のエホバの証人、ドイツ人の共産党員、シングルマザーの娘だったために収容された女性など様々な国籍の女性が登場し、自らの経験を語っている。

収容所に入れられると女性たちは、まず、女性たちは服を脱がされ、身体検査を受けた。シラミがいたりすれば丸刈りにされた。証言や回想録を残しているほとんどの女性が自らがうけた辱めについて語っている。「私たちは医師の前に一列に立たされました。50 名の裸の女性、多くが髪の毛を刈られていました。何人かはビーナスのように自分の身体を隠していました。（略）手は横に。（略）そして、微かな慎みの心は捨てなければなりませんでした」[37] 灰色と青色の縦縞の囚人服が与えられた。サイズもバラバラで、履物にしても左右揃っていないものもあった。アントニア・フレシェデス（リスト 47）が受け取ったのは、片方が男性用の靴、もう片方はハイヒールだったという[38]。収容者が急増すると囚人服は支給されなくなった。代わりに服には大きな×印がペンキで書かれた。脱走できないようにである。胸には収容者番号を表

---

[35] 第二共和国時代に外交官としてスペインに赴任していたチリの詩人パブロ・ネルーダの秘書を務める。内戦後、避難したフランスで捕らえられスペインに送還されて、マドリードで投獄される。その後、再びフランスへ避難し、レジスタンスに参加。捕らえられラーフェンスブリュックに収容された。カタルーニャ語で刊行された *El carretó dels gossos: una catalana a Ravensbrück* ではラーフェンスブリュックでの体験を語っている。同書は NUÑEZ TARGA, Mercedes: *Destinada al Crematorio:De Argeles a Ravensbrück: Las viviencias de una resistente republicana española,* Sevilla, 2011. としてスペイン語版が刊行された。カタルーニャ語からスペイン語への翻訳をしたのは、ヌニェスの息子とその伴侶である。

[36] Elizabeth Ricol London はスペイン人の両親のもと、フランスで生まれたフランス人である。若い時から共産党員で 1931 年からリヨンの共産党支部で働き、1933 年からモスクワのコミンテルンで働いた。モスクワで知り合ったアーサー・ロンドンとは生涯を通じて伴侶となる。そのため、夫の姓の Lise LONDON という名前で知られており、スペインで出版された回想録でもこの名前を使用している。スペイン内戦中は国際義勇兵の組織の仕事をした。2012 年 5 月 29 日付けの *The Independent* 紙に掲載された死亡記事によると、彼女は義勇兵の中での最後の女性の生存者だった。

[37] BUBER-NEUMANN, Margarete: *Under two dictators*, London, Pimlico, 2008, pp.163-164. 訳は筆者。同書は日本語訳が出ている。マルガレーテ・ブーバー・ノイマン『スターリンとヒットラーの軛のもとで』2008 年、ミネルヴァ書房。

[38] CATALÀ, Neus: *op. cit.*, p.126.

す札と様々な色の逆三角形の三角章が縫い付けられた。三角章の色は「罪」の種類によって異なった。ユダヤ人は黄色、政治犯は赤、ロマや同性愛者、売春婦など「反社会的」とされた人々は黒、ナチの法律を冒した「犯罪者」は緑、エホバの証人は紫といった具合である。例えば、ユダヤ人でなおかつ政治犯だったら、黄色と赤の三角章を、ユダヤ人でアーリア人種と関係を持つなどした人種冒涜者の場合には黄色と黒の三角章を組み合わせたダビデの星をつけさせられた。三角章には国籍をあらわす頭文字が書かれた。スペイン人の場合は、S になるはずなのだが、彼女たちの場合にはスペインの S ではなく、フランスの F だった[39]。ただし、すべての収容者に国籍を表す頭文字が書かれていたというわけでもないようだ。ティヨンによれば、一緒に収容されていたウクライナ人は U の頭文字をつけていたが、ドイツ人もフランス人も頭文字がついていない赤い三角章をつけていた[40]。スペイン人女性は、フランスで捕らえられ移送されたこともあり、フランス人と混同されていた。移住者用には青色の三角章があり[41]、マウトハウゼンに収容されていたスペイン人は S の文字が入った青い三角章を着けていた[42] が、ラーフェンブスリュックのスペイン人女性はそうではなかった。したがって、スペイン人を分析していくにあたって、フランス人を対象とした研究も参考になると思われるが、管見によればそうした研究でスペイン人への言及はない[43]。

各地の強制収容所で様々な人体実験が行なわれていたが、ラーフェンスブリュックでは 1942 年から主として、ポーランド人女性を対象として、骨や筋肉、神経に関する実験が行われた。ロマの女性たちに対しては避妊手術が

---

[39] DELEGEUR MERCADÈ, Elisenda:*Neus Català Memòria i lluita*, Barcelona, Fundació Pere Adriaca, 2006, p.80.
ネウスはフランス人と結婚していたため、フランス国籍も持っていた。

[40] TILLION, Germaine, *op. cit.*, p.27.

[41] BEBMANN, Alyn, ECSHEBACK, Insa: *The Ravensbrück Women's Concentration Camp History and Memory*, Metropol, Berlin, 2013, p.41.

[42] S の入った青い三角章はマウトハンゼン抑留者協会のシンボルマークともなっている。

[43] 二人の女性が殺されたケースについても、一人はスペイン人だったため、フランス人女性のケースのみが記録されてるという場合もある。リスト 113 番の Mimi は Françoise とともに絞首刑にされたが、*Les Francaises a Revensbrück* ではフランソワーズのみの名前があげられているという。Amicas, *op. cit.*, p.115.

施された。こうした実験の結果、被験者となった女性たちは命を落とすか、仮に生き延びたとしても生涯を通じて後遺症に悩まされる事になった。彼女たちはモルモットと呼ばれていたが、受けた扱いは動物以下だった。当初は麻酔なしで手術が施された。女性たちが苦悩の声を上げ、看護棟の隣に住んでいた SS たちの気に障ったらしく、鎮痛剤等が処方されるようになったという[44]。人体実験の対象になったのは、ポーランド人だけではなかった。スペイン人のアルフォンシーナ・ブエノ（リスト 16）は SS 医師のカール・ゲープハルトによる人体実験の被験者となった。彼女はラーフェンスブリュックで子宮に注射をされた。何の注射かわからなかったが、子宮口から出てきた液体で皮膚をやけどしたという[45]。彼女は注射の後遺症をかかえながら 1979 年に亡くなった[46]。

多くの女性たちが月経を止めるための医学的処置を受けた。月経があると生産性が落ちると考えられたからである。収容所での過酷な生活の中で月経の手当をどうするかは大きな問題であった。生活状況が変わったことにより、月経が止まったり、月経を回避する医学的処置を受けることも多かった。それでも月経を迎える人はいた。生理用品は支給されないので、女性たちは経血をそのまま垂れ流しにするしかなかった。

当事者たちの証言からはあまり出てこない事実が、収容所における強制売春である。これは収容所の歴史のなかでも覆い隠されてきた部分である。収容所での女性への性暴力については、あまり取り上げられることがなかったが、第二次大戦中の日本の従軍慰安婦問題に関心をいただいたクリスタ・パウルらによって少しずつ実態が明らかになりつつある[47]。「ナチスが一方では売春を断罪し、売春にドイツの堅気の母親や主婦を対置しておきながら、他方では売春をますます大規模に促進した」[48] のである。こうした性のダブル

---

[44] ポーランド人で人体実験をうけた Stanislawa Baffia の証言。ARMENGOU, BELIS: *Ravensbrück: El infierno de las mujeres*, p.213.
[45] CATALÀ, Neus, *De la deportación…*p.91.
[46] *Memorial Mujeres Españolas*, p.4.
[47] クリスタ・パウル著、イエミン恵子、池永記代美、梶村道子、ノリス恵美、浜田和子訳『ナチズムと強制売春　強制収容所特別棟の女性たち』明石書店、1996 年。
[48] 前掲書 13 頁。

スタンダードはこの時期のナチドイツに限ったことではなく、まったく同じような理由で、例えば内戦中、内戦後のスペインでも存在した。1942 年以降、ラーフェンブスリュックに収容されていた女性たちは他のキャンプに連行され、ナチの SS や収容者（「模範的な」人物のみ）の相手をさせられた。「任務」が終わったら釈放されると言われ、みずから志願した女性たちもいた。ドロレス・カサデーリャ（リスト 21）はポーランド人の看守（看守も収容者）から早く出たければ慰安所に志願することだと言われたという[49]。ノイマンは 1942 年に SS 将校の委員会がマウトハウゼン収容所からやってきて、12 名の女性が慰安婦として「選抜」されていったことを回想している[50]。

収容所での毎日はどんなだったのだろうか。リビューの著作から素描してみたい。起床は午前三時半。洗面所は数百人の女性あたり、流しは 20 くらい。トイレは 1000 人あたり、便器が 10 個。ドアなしのトイレや、穴のあいた長い渡し板だけの場合もある。炒ったドングリを煎じた、苦い、砂糖も入っていない液体、それが朝のコーヒーだった。

収容者たちは多くの時間を点呼のために直立して過ごしていた。ブロックごとの人数確認のための人員点呼が朝と夕方に、その他に労働点呼、全体点呼があった。点呼の間、女性たちは直立不動で気をつけの姿勢をとらなければならず、誰かが倒れても、手を差し伸べてはいけなかった。特に冬の氷点下の気温の中で過ごすのは厳しくそこで体調を崩す人も多かった。

食事は朝はコーヒー、昼はスープ（スープに加えてジャガイモの配給があったが、それも徐々に減らされ、最後にはなくなった。）夕食はパンと薄いスープだったが、それもいつのまにか代用コーヒーになった。

衛生状態も悪化し、当初は定期的に行なわれていた下着の交換もそのうちなくなった。それぞれ洗剤はないので、水だけで洗って、寝台にかけて乾かすが、盗まれないかと心配しながら夜を過ごした。そうした状況下で、女性たちたちは長時間の強制労働に従事させられた。長い労働の時間中、トイレ

---

[49] ROIG, *op. cit.,* p.65

[50] マルガレーテ・ブーバー=ノイマン著、林晶訳『スターリンとヒットラーの軛のもとで』ミネルヴァ書房、2008 年、227 頁。

に立つ事すら、決められた時間以外には認められなかった[51]。

モリソンの著作[52] には収容者たちが描いたスケッチが多く掲載されている。日常生活を描き出した同書では、反ナチ、反社会的な女性たちの矯正が目的で設置された収容所が、強制労働の供給源となり、そして最後にはガス室が設けられ、「絶滅」収容所になったかを追っている。

３　スペイン人女性収容者

これまでに明らかになったデータに基づき、収容されていたスペイン人女性について分析をしていく。ラーフェンスブリュック収容所についての回想録[53] や収容者についての研究書はドイツ語、フランス語、英語などでいくつか出版されている。しかし、スペイン人女性についての言及はごくわずかである。スペインでラーフェンブスリュックについての研究を担ってきたのは、ネウス・カタラーらの元収容者や「ラーフェンブスリュック抑留者協会」[54] である。抑留者協会のロサ・トランは 1995 年にラーフェンブスリュック強制収容所について論文を発表した[55]。ただし、この論文ではスペイン人女性についての言及はごく僅かで、何名かの名前があげられているだけである。スペイン人女性についての情報の多くはオーラル・ヒストリーによっている。近年、ジャーナリストやラーフェンブスリュック抑留者協会によって、元抑留者たちについての情報の蒐集が進んできた。その成果は当初、ラーフェン

---

[51] リピュー著、前掲書、213～218 頁。

[52] MORRIOSON, Jack G.; *Ravensbrück Everyday Life in a Women's Concentration Camp 1939-1945*, Princeton, Markus Wiener Publishers, 2000.

[53] 以下の著作の翻訳者であり編者のベーアが英語で読める回想録を 12 冊紹介している。HERBERMANN, Nanda: *The Blyssed Abyss*, Detroit, Wayne State UP, 2000, pp.253-260.

[54] 2005 年にバルセロナで結成された。それ以前には 1962 年に創設された「マウトハウゼンその他の収容所への抑留者協会」（Amical de Mauthausen y otros campos）に組織されていた。

[55] TRAN, Rosa: "L'infern de les dones, El camp de concentració de Ravensbrück", en *Butlletí de la Societat Catalana d'Estudis Històrics*, Núm XVI, 2005, pp.133-150.

スブリュック抑留者協会のホームページでウェブ上での公開[56] であったが、2012 年には書籍の形でこれまでの研究の成果がまとめられた[57]。

しかし、いまだに何名のスペイン人女性がラーフェンスブリュックに収容されていたのか、正確な数字は不明である。ポール・プレストンは『スペインのホロコースト』で、ラーフェンスブリュックに収容されていたスペイン人女性数について 101 名という数字をあげている[58]。これは新リストに掲載されている人数であるが、これはあくまでも抑留者協会の調査の結果、明らかになった女性たちの人数であって、実際にはもっと多いであろうと思われる[59]。マヌエル・イスキエルドはフランスで勾留された 250 名のスペイン人女性をあげている。そのうち、ラーフェンブスリュックに収容された 27 名を特定した[60]。フレシェデス（リスト 47）によれば、ノエのキャンプから 250 名以上のスペイン人女性がラーフェンブスリュックに向かったと証言している[61]。

「ラーフェンスブリュック抑留者協会」のホームページに掲載されていたリスト（以下旧リストと表記する）に掲載されていたのは 119 名のスペイン人であろうと思われる女性たちである。彼女たちについて氏名、異名、出生地、出生年月日、職業、既婚未婚の区別、逮捕場所、逮捕日、逮捕理由、収容場所、収容者番号、収容年月日、移送、移送番号、移送日、死去したか解放されたか、その年月日、場所が示されている。この旧リストは 1965 年から 10 年を費やし、ネウス・カタラーが中心となって 6 名の女性たちがグルー

---

[56] http://www.depardocreative.com/web_censo/censo_deportadas.html 最終アクセス　2012 年 12 月　現在はアクセス不可能となっている。

[57] Amics de Ravensbrück, *Memorial de la españolas deportadas a Ravensbrück*, Barcelona, 2012.

[58] PRESTON, Paul: *The Spanish Holocaust*, London, Harper Press, 2013, p516.

[59] リョルは 400 名という数字をあげている。LLOR, Montserrat: ”Supervivientes españolas en el infierno nazi”, *El País*, 13 de junio de 2010. リョルは元収容者たちにインタヴューをし、どういった要因で収容所を生きのびることができたのかを探って著作を発表している。LLOR, Montserrat: *Vivos en el Averno Nazi*, Barcelona, Crítica, 2014.

[60] IZQUIERDO, Manuel, *Suplemento, Patrióte Résistant*, 426, abril de 1975. pp.10-11 であげている数字。（筆者は未見）ROIG, Montserrat: *Noche y Niebla Los catalanes en los campos nazi*, p.64,

[61] CATALÀ, Neus, *op. cit.,* p.129.

プを結成し、フランスでレジスタンスに参加した女性たちの声を集めて作製した資料『スペイン女性の忘備録』[62] 及び、モンセラット・ローチの著作 『ナチ収容所のカタルーニャ人』[63] をベースとして、カタルーニャ自治州の民主記念（memorial democràtic）のデータベース、スペイン外務省資料、ラーフェンスブリュックの文書館、ドイツ、オーストリアの研究者やラーフェンスブリュック抑留者協会フランス支部などの協力を得て作製されたものである。また、ラーフェンスブリュック解放 65 周年を記念して刊行された小冊子には、132 名のリストが掲載されている[64]。ただし、そのうち 10 名についてはファーストネーム、もしくはニックネームがわかっているのみであった。その後の調査の結果、出版された最新のリスト（以下　新リストと表記する）には 101 名の女性の名前が掲載されている[65]。本稿では旧リストと新リスト及びそれぞれのデータを照らし合わせた上で、暫定版のリストを作製し、掲載することとした（文末のリスト）。旧リストに掲載されていたうち、新リストには掲載されていない人々については、あきらかに同一人物と判明した人々以外は、そのまま掲載することとした。リストに Ref 番号が掲載されているのが、新リストに掲載されている人々である。同じレファレンスから数名についての情報を得ている場合もあるので、その場合には数名が同じ番号となっている。Ref 欄が空欄の人は旧リストに掲載されているが、新リストからは消えている人々である。今回のリストでは、新たに収容時の年齢及び、スペイン内戦とのかかわりという点から、「フランス滞在」という欄をもうけ、内戦時にスペインにいたのか、それともフランスにいたのかを明記した。このリストは現在までわかっている状況の最新版ではあるが、決定版というわけではない。

---

[62] CATALÀ,, Neus, et. al: *Memorial de Mujeres Españolas en la Segunda Guerra Muncial*, http://www.ceibm.org/neuscata2100.html（アクセス日 2013 年 11 月 25 日）

[63] ROIG, Montserrat: *Els catalans als camps nazis,* Barcelona, Edicions62, 1977. 筆者 2013 が参照したのはスペイン語版。

[64] Amics de Ravensbrück, *Homenaje a las deportadas españolas con motivo del 65 aniversario de la liberación del campo de concentración Nazi de Ravenbrück.* Barcelona, 2011. pp.32-44.

[65] Amics de Ravensbrück (ed.): *Memorial de las deportadas españolas a Ravensbrück*, Barcelona, 2012, pp.132-135.

2006 年にスペイン文化省から刊行された『メモリアルブック』[66] には男女を問わず、抑留されたスペイン人が出身地方別に掲載されている。掲載されている約 9 千名のデータを確認したが、今回のリストに掲載されていながら、そこには掲載されていない女性たちもいる。また、『メモリアルブック』には解放間近になって、ラーフェンブスブリュックに移送された男性も何名か掲載されている。

ナチがラーフェンブスリュック収容所への入所者について、きちんとデータを取っていたのは 1942 年までである。その上、収容所が解放される際にかなりの資料を破棄してしまった。そもそもきちんとした形での史料が残っていない上、フランスに亡命し、レジスタンスに関わっていた女性たちはしばしば本名を明らかにしないこともあり作りは難航してきた[67]。調査の糸口となるのは残存資料及び回想録、インタビューなど個人の記憶に頼る部分が多い。特にスペイン人女性の場合には、移送された経緯からフランス人女性と混同されてきたこともあり正確な人数が明らかにならないまま現在に至っている。

何をもって「スペイン人」とみなすかも難しい。内戦以前からフランスに経済移民としてすでに移住していた人たちもいる。フランスで生まれたり、幼少時にフランスに移住していたりしたケースもある。スペイン人両親のもとに生まれたとしても、両親とともに移住したり、スペイン系ユダヤ人でベルギーのユダヤ人街に住んでいたり、また、スペイン内戦中にソ連に養子として引き取られた女性などもいる。そうした女性たちもリストには掲載されている。新リストが掲載された報告書では「スペイン関係者」として別項目が設けられている。「スペイン関係者」としてあげられているのは、スペイン人男性と結婚していたフランス人女性（リスト 25 ）、セファルディー（スペインから追放されたユダヤ人の子孫）一家の 3 名（リスト 26,27,28。それにこの一家には弟がいて一緒に収容された）、バルセローナのスペイン系ユダヤ

---

66 BERMEJO, Benito, CHECA, Sandra: *Libro memorial:españoles deportados a los campos nazis (1940-1945)*, Ministerio de Cultura, Madrid, 2006.

67 一例として、リスト番号 88 のヌニェス・タルガと 95 のフランシスカ・プーチは同一人物である可能性がある。

人と結婚した女性とその娘の 2 名（リスト 70、71　父親はブーヘンヴァルトに収容されていた）、フランスに移住していたスペイン人夫婦の娘 1 名（リスト 92）、ポーランド生まれであるが、内戦に国際義勇兵として参加したため、スペイン国籍を与えられた女性 1 名（リスト 123）の合計 9 名があげられている。また内戦中にソ連に避難し、その後、ソ連人と結婚してソ連在住の女性[68]（リスト 39）も収容されていた。

新リストに掲載されている人数は、旧リストに掲載の 119 名から、101 名へと減少しているが、理由の一つとして、スペイン人の名前の特殊性がある。スペイン人は 2 つ以上のファーストネームを持っているケースが珍しくない。さらに子供の姓は父親の姓と母親の姓を組み合わせて複合姓として作る。基本的には夫婦別姓で、生まれた時の姓を一生使うのが普通であり、結婚しても夫の姓を名のることはほとんどない。

ファーストネームが 2 つあり、それがそれぞれ別の人物だとされていたのが、調査の結果、同一人物だとわかったのが、マリア・レオノール・ルビアーノ・フェルナンデス（リスト 101）である。また同じ名前であっても、何語で表すかによって異なる。例えば、スペイン語（カスティージャ語）でカルメン（Carmen）という名前はカタルーニャ語ではカルマ（Carme）となる。また、ネウス・カタラーのネウス（Neus）という名前はカタルーニャ語で、スペイン語ではニエベス（Nieves）となるが、彼女がラーフェンスブリュックに移送された際の書類には、フランス語でネージュ（Neige）と記載されていた。外国人と結婚して、夫の姓を名乗っていて独身時代の姓が不明なケース、ファン（VAN）（リスト 117）のようなケースもある。ホセファ・マランジェ・ボベルはフランス人と結婚し夫の姓のドゥルーズ（Deleuze）を名乗っていた。もちろん、レジスタンスで偽名を名乗り、偽身分証明書等を持っていてそのまま登録された人もいるであろう。スペイン人としてリストに入っているジルベルベルグ（Zirvergberg）（リスト 123）は、内戦中に国際義勇兵に参加したため、スペイン国籍を取得したポーランド生まれの女性である。アンナ・ロダ（リスト 98）のように、収容所を生きのびたものの、証

[68] エリサ・ルイスの証言。CATALÀ, Neus: *op. cit.*, p.255.

言を拒否し、名前をリストに載せることだけを許可したというケースもある[69]。

ラーフェンスブリュックにスペイン人が収容されたのは、主として 1944 年以降である。冒頭にあげたネウス・カタラーが収容された 27000 輸送集団[70] では 16 名のスペイン人が確認されている。1942 年に収容された女性もいる。アンヘルス・マルティネス（リスト 77）は 1942 年から 2 年 10 ヶ月 22 日間、ラーフェンスブリュックにいた[71]。彼女は家族とともに内戦以前にフランスに移住していた。最後の収容は 1944 年 8 月 28 日となっている。

判明している死亡者は 12 名、そのうち 1 名が絞首刑、1 名はアウシュビッツのガス室に送られ、1 名は生きたまま焼かれたのと証言が残っている。

収容当時の年齢は、最年長が 59 歳で最年少が 4 歳の少女である。40 歳代や 50 歳代の女性はいるが、60 歳以上の女性はいない。高齢者は移送の途中で亡くなった可能性も考えられるし、ラーフェンブスブリュックに収容される以前に、監獄、他の収容所での生活に耐えられず病死、もしくは労働に不適切などの理由で殺されたということも考えられる。

監獄や他の収容所からの移送は家畜用の窓もない貨車で行なわれた。すし詰めの移送中に亡くなる人もいた。冒頭にあげたネウス・カタラーが移送された 27000 輸送集団は 5 日間だったが、それ以上に及ぶ場合もあった。例えば、ノエから移送されたアントニア・フレシェデスは移送が何日間続いたか覚えていないが、移送の最終期間は 9 日間続いたと証言している。その間、

---

69 Amics de Ravensbrück (ed.), *Memorial de las españolas deportadas a Ravensbrück*, p.110.

70 この時に移送された人数は厳密には 958 名。フランスのコンピエーニュから移送された。フランスからラーフェンスブリュックへの移送の日付と収容人数については、Amigos de Ravensbrück y Asociación de Deportadas e Internadas de la Resistencia, *Mujeres bajo el nazismo*, Barcelona, Editorial Fontanella, 1966.の巻末にリストが掲載されている。このリストは Germaine Tillion, Rosa Guérin（los Amigos de Ravensbrück）およびドイツからの資料に基づいて作製されたものである。同書はラーフェンブスリュックについての多くの研究の原典の一つとなっている *Les françaises à Ravensbrück*, Gallimard, París のスペイン語訳である。

71 PONS PRADERA, Eduardo: *El holocausto de los republicanos españoles: vida y muerte en los campos de exterminio alemans (1940-1945)*, Barcelona, Belacqca Ediciones, 2005 に掲載されている証言によると、ラーヴェンブスリュックへの収容は 1942 年 9 月となっている。また名前も Angeles ではなく Angelines となっている。p.305.

食べ物は与えられず、時折水が支給されるだけだったという[72]。フランスからの移送が数ヶ月に及んだケースもある。コンチャ・グランジェと叔母、従姉妹が乗った移送列車の場合には、トゥルーズからボルドーに向かったが、ボルドーに到着前にアメリカ軍が捕虜を解放しようと列車に発砲したため、途中で 15 日ほど待機し、再びトゥルーズへ戻った。その後、他のルートでザーレブリュックへと向かい、数キロを徒歩で移動させられたという[73]。

収容理由はレジスタンス、政治、スペイン人のアカなどとなっているが、いずれも政治的理由での収容である。「スペイン人のアカ」というのは、スペイン人でないが、スペイン内戦に拘って左派の活動をし、その延長上で活動をしていた場合に使用された表現のようである[74]。収容理由の「政治」というのは、あまり深い意味はなく、ユダヤ人という人種ゆえに収容されたのではないという程度の意味である[75]。

スペイン内戦後フランスに亡命した人もいれば、それ以前に経済移民としてフランスに移住していた人もいる。1942 年から収容されていたアンヘリーネス・マルティネスは両親の移住先のフランスのサン・ドニで生まれた。フランスへの経済移民はフランス人が好まない低賃金、危険、非衛生的な仕事に携わっていたことが多かった。内戦が勃発すると、マルティネス家は一家をあげて共和国側の支援に乗り出した。アンヘリーネスのきょうだいはスペインに戦いに行った。フランスに残った家族は近隣の仲間と共和国政府を支援する組織を結成し活動を行なっていた。内戦終結後はスペインからの亡命者が収容されていたキャンプに支援物資や励ましの手紙を送った。第二次大戦が勃発すると、活動が制限され支援グループの中心メンバーが逮捕されるようになっていく。そのころアンヘリーネスはレオノール・ルビアーノ（リスト 101）と知り合う。一家は仕事もなく、フランス政府から厳しい仕打ちを受けていた。スペインに戦いに行き、負傷して帰国したきょうだいには「スペイン人のアカ」とのレッテルが貼られる。1940 年春にはドイツ軍の侵攻に

---

72 CATALÀ, Neus: *op. cit.,* p.125.
73 Amics de Ravensbrück, *op. cit.*, p85.
74 BERMEJO, CHECA: *op. cit.,* p.30. ドイツ語で Rotspaier と呼ばれた。
75 TILLION, Germaine, *op. cit.,* p.120.

よりパリ郊外から南部へと避難を余儀なくされた。その後、再びパリ郊外に戻ったアンヘリーネスはきょうだいやレオノールとともに反ファシズムの地下活動を始めた。彼らの家はそうした活動に携わる人々の避難所、集会所となっていく。1941 年、アンヘリーネスとレオノールは逮捕され、サンテ刑務所に収監された。最初彼女たちを尋問したのはフランス警察で、その後、ナチからの取り調べを受ける。移送先のドイツのプリュム刑務所で、1942 年のフランス革命記念日 7 月 14 日にはスペイン人、フランス人女性たちと一緒に、フランス国旗を作製したり、ラ・マルセイエーズを歌うなどの抵抗行為を行ない、数日後にポーランド国境付近のシレジアへと移送される。1942 年 9 月にはレオノールとともにラーフェンスブリュックへと送られた。彼女たちは「夜と霧」と呼ばれた一団だった。「夜と霧」とはナチドイツに反抗した人々をこっそりと拉致して、霧のように消してしまうという作戦だった[76]。「夜と霧」の人々は収容所の柵外に出ることはあり得ず、手紙のやりとりも禁じられていた。アンヘリーネスはラーフェンブスリュックに残り、レオノールは付属キャンプで軍服の縫製の仕事をすることになった。軍服縫製工場の監督は悪名高き SS で、工場のアイロンで何人もの女性たちを傷つけていた人物だった。レオノールもその犠牲となり、アンヘリーネスはレオノールと再会することはなかった。レオノールは 1944 年 12 月に病に倒れ、45 年 2 月に命を落とした[77]。

スペイン人収容者たちのスペインにいた時の政治活動については、あまり明らかになっていないが、アナーキスト系組合メンバー、カタルーニャの共産党、左派地域主義政党、共産党員といった政治グループで政治活動に直接的に拘っていた女性もいれば、単に組合員だったという場合もある[78]。いずれも労働者階級の女性たちである。家族全員が左派支持であった場合が多いが、ドロレス・カサデージャ（リスト 21）のように、自分以外の家族はすべて右派だったというケースもある。第二共和国時代に政治家や政党、政治グ

---

[76] 「夜と霧」法は 1941 年 12 月 7 日の政令で定められ、1944 年 7 月 30 日に廃止された。この名前の発案者はヒットラーで、ワーグナーの作品から着想を得たらしい。マルセル・リュビー『ナチ強制・絶滅収容所』40-41 頁。

[77] PONS PRADES, Eduardo: *op. cit.*, pp.299-305.

[78] ROIG, M.: *op. cit.*, p.33.

ループ、組合などで中心的な役割を果たした女性たちのなかにも、フランスへの亡命者もいるがそうした人たちは収容者には含まれていない。例えば、第二共和国時代に国会議員を務めたビクトリア・ケントはマダム・デュヴァルとしてパリで過ごしていた[79]。この点については、今後の課題と一つとしたい。

スペイン人の場合にはほとんどが政治的理由、レジスタンスに拘ったというのが収容理由である。なかには例外もいる。ユダヤ系スペイン人である。これまで確認されているのは 6 名であるが、彼女たちは「ユダヤ人」として黄色い三角章をつけていたのではなく、政治犯として赤い三角章をつけていた。

最年少で 4 歳で収容されたエストレージャ（リスト 71）[80] の父親はバルセローナ出身のユダヤ系スペイン人、母親はイギリス系ユダヤ人だった。両親はスペイン内戦後移住先のベルギーでレジスタンス運動に身を投じていた。エストレージャは両親ともにアントワープでゲシュタポに捕まった。父親はブーヘンワルトに送られ、エストレージャは母親と共にラーフェンスブリュックに収容された。ラーフェンスブリュックに収容された時、エストレージャはドイツ語で「私はスペイン人です」と言うように、そして決してユダヤ人だとは言わないようにと教え込まれた[81]。数ヶ月後、母親（リスト 70 ）は亡くなる。母親の死後、収容所の仲間が「収容所の母親」として幼い少女エストレージャの面倒をみた。複数の女性が母親代わりをするのではなく、いつでも誰か一人がエストレージャの「母親」となった。こうしたつながりがあったからこそ、労働力にならない少女が生き残る事ができた。収容所内部での人々の結びつきについては様々な考察があるが、このように「疑似家族」を形成して、お互い支え合って生きていくというのは女性たちならではの行動だった。食糧を分け合ったり、具合が悪い人たちを時にはベッドの隙

---

[79] ケントのパリでの生活については以下の回想録がある。KENT, Victoria: *Cuatro años en París*, Madrid, Gadir Editorial, 2007.

[80] シャルロット・ミュラーの回想ではステラとして登場する。ミュラー、前掲書、109～114 頁。ミュラーは 1961 年、ソ連訪問の際にステラと再会している。

[81] SAIDEL, Rochell G.: *The Jewish women of Ravensbrück Concentration Camp*, Wisconsin, Univ. of Wisconsin Press, 2004, p.70.

間などに隠しながら、支えていたのも「家族」であった。ライズ・ロンドンも回想録で仮の「家族」を形成していたことを語っている。「わたしたちは 5 人“家族”を作りました。それぞれの家族には、メンバーの間から選ばれた一人の“お母さん”がいました。そして食事の時にはお母さんが飢えた“娘たち”にわずかな食べ物を平等に分ける役割を果たしていました」[82] ネウス・カタラーも 5 人「家族」で、それぞれが異なった国籍だったので、お互いにジェスチャーで理解しあったという[83]。

ゲシュタポにつかまって[84]、フランス国内の監獄に勾留されてから、ラーフェンスブリュックに直接収容された人もいれば、ダッハウなど他の収容所から移送された人もいる。解放までラーフェンスブリュックにいた人もいれば、他の収容所に移送された人もいる。なぜラーフェンスブリュックにずっと滞在した人と、他の収容所に移送された人がいるのか、移送の理由などは現時点までの研究では不明である。

1945 年初頭、連合軍がラーフェンスブリュックに接近してきたため、マウトハウゼンに向けて収容者の移送が始まった[85]。1945 年 3 月 2 日には、ラーフェンスブリュックから 1,981 名の女性と子供がマウトハウゼンに移送された。5 日かけてマウトハウゼンに到着すると、働ける人とそうでない人の「選別」が行なわれ、子供はすべて殺され、残ったのは 1,799 名だった。そのうち、579 名がフランス人、4 名がスペイン人だった。スペイン人のうち 2 名アルフォンシーノ・ブエノ（リスト 16）とホアキン・オラソ・ピエラの妻（氏名不明）の夫はマウトハウゼンに収容されていた。しかし、男性と女性は別々の収容棟だったので配偶者同士であっても面会は難しい。オラソの場合には、医務室で再会を果たしたがこれは収容者カップルが収容所内で再会を果たした唯一のケースだという[86]。

収容所までの移送中や、収容所での劣悪な環境で体力を落とし、亡くなった人もいる。また、ガス室で殺された人もいる。アンヘリーネスの友人であっ

---

[82] ARMENGOU, BELIS,: *Ravensbrück: El infierno de las mujeres,* p133.
[83] *Ibid.: p.70.*
[84] ドイツ占領下のフランスでは、フランス官警が逮捕することもあった。
[85] Angelines Martínez の証言。PONS PRADES, Eduardo, *op. cit.*, p.307.
[86] PIKE David Wingeate: *op. cit.,* pp.341-342.

たレオノール・ルビアーノ・フェルナンデス（リスト 101）は、体調を崩して重病患者の多い棟に収容されたものの持ちこたえていたので、最終的にガス室送りになったらしい[87]。当初、ラーフェンスブリュックにはガス室はなく、ガス室送りになる場合は他の収容所に移送されていたが、1944 年 12 月にはラーフェンスブリュックにもガス室が作られた。マリア・タピア・エステバン（リスト 113）はラーフェンスブリュックで解放直前の 1945 年 4 月 30 日にサボタージュにより絞首刑となった[88]。

4　おわりに

スペイン人女性がラーフェンブスリュックに収容されたのは、ラーフェンブスリュックへの収容者数が増え､収容所の状況が過酷になってからである。したがって、それ以前に収容されていた人々とは随分状況が異なっている。強制収容所での体験は辛く過酷なものであったことには違いがない｡しかし、亡命していたスペイン人女性たちにとっては、収容所が解放されても帰る場所がなかった。スペインではフランコ独裁が続いていたからである。これが他国の人々との決定的な違いである。ラーフェンスブリュックは彼女たちにとっては、通過点に過ぎなかった。スペインからピレネーを越えてフランスに到着してからも、反ファシズム闘争を続けていた。レジスタンスの活動に積極的に拘っていた人もいれば、単に家にレジスタンスの闘士をかくまっていただけの場合もある。最初に名前をあげたネウス・カタラーはラーフェンスブリュックから解放された時に赤十字のフランス人女性に「あなたたちは家で子供たちのシーツを洗っていたら、こんな目にあわなくて済んだのに」と言われて激昂した[89]。ラーフェンブスリュックに収容されたスペイン人女性たちは、自らの意思で自由のために戦っていた女性たちだったということができる。収容所で辛い目にあっても、屈せず生きのびるという強い意志を

---

[87] Amics de Ravensbrück, *op. cit.*, p.112. ニュルンベルク裁判での Marie-Claude Vaillant-Couturier の証言。
[88] *Ibid*,. p.114-115.
[89] ROIG, Montserrat: *Noche y Niebla: Los catalanes en los campos nazis*, Barcelona, Ediciones Península, 1980, p.300.

持って生き抜いた女性たちである。

ラーフェンスブリュックに収容されていたスペイン女性たちについて、さらなる研究を続けていきたいが、今後の課題をいくつかあげておきたい。収容所内で「国籍」の違いというのが、どの程度意味をもっていたのかという点がまず一点である。収容は国籍別に行なわれていたわけではない。回想録をかいた人々が「スペイン人」についてふれていないのは、単に数が少なかったからだけなのか、それともフランス人と同化していたからなのかを探ってみたい。「ほかの収容所の男性たちがそうであったように、女性たちもまず国籍ごとにまとまり、共産主義者たちがそれとは別の非常に組織力の強いグループを構成したいた」[90] とあるが、今回参照した資料からは、そのような実態はあまり見えてこない。スペイン人の亡命という視点からは、男性のマウトハウゼンへの収容が 1940 年から 42 年頃が一番多かったのに対して、女性たちのラーフェンブスリュックへの収容は、かなり時間が経ってからなのはどういった理由があるのかも明らかにしてみたい。そして、強制収容所から解放された後に帰る「国」がなかった女性たちはどういった人生を送ったのかを、それぞれの収容者についてもたどっていきたいと思っている。

[90] リュビー、前掲書、220 頁。

番号	Ref.	姓	名もしくは異名	収容者番号	出身地
1			Katia		
2			Elena		
3		ADROVER	Yvonne	27030	
4	1	ALONSO	Felisa	47295	
5	2	ÁLVAREZ	Ángeles	49689	アストゥリアス
6	2	FERNÁNDEZ	Natividad (ÁLVAREZ)	49687	アストゥリアス
7		BALCASEN	Merce		
8	3	BARCELÓ	Secundina	57610	アラゴン
9	4	BARROSO			
10	5	BARTOLÍ GARDEL	Sabina	27156	カタルーニャ
11	6	BEGUIRISTAIN	María Juana	19424	バスク
12	7	BENITEZ LÚQUEZ	María Antonia	43218	アンダルシア
13	8	BERNAL	Mercedes		フランス
14	9	BORDANOVA	Josephine	43220	フランス
15	10	BUATELL COSTA	Carme	42271	カタルーニャ
16	11	BUENO VELA	Alfonsina (Ester)	37884	カタルーニャ
17	12	BUITRAGO	María		
18	13	CABEZA RODRÍGUEZ	Ángela	39144	レオン
19	14	CALDERÓN	Adriaine	27086	カスティージャレオン
20	15	CANOVAS MOLENO	Braulia （JENÉ Mónica）	27700	アンダルシア
21	16	CASADELLÀ（GENER）	Dolors	35160	カタルーニャ
22	17	CASTELLANO	Juana		
23	18	CATALA i PALLEJA	Neus	27534	カタルーニャ
24	19	CLAVEL			
25	20	COERDUROY	Marie Louise (RODRÍGUEZ)	39221	
26	21	COHEN Y ESCALONI	Esther		ベルギー
27	21	COHEN Y ESCALONI	Lilianne Elise		ベルギー
28	21	COHEN Y ESCALONI	Rita		ベルギー
29	22	CORBIS	Nieves		
30	23	COREL COSMITH	Berta （GOLDSCHMIDT）	33477	
31	24	COROMINAS	Conchita の母親		
32	24	COROMINAS	Conchita		
33	25	CORTÉS	Soledad	27099	アンダルシア
34	26	COSTEL	Terersa	27637	
35	27	CRISTÓFAL BRETOS	Antonia	27627	アラゴン
36	28	CUEVAS ESCRIVA	Virtudes （MadameVIDAL,Carmen）	27301	バレンシア
37	29	ENCUENTRA CAMPO	María Teresa (BESCOS,Teresa)	39260	アラゴン
38	30	ESCARRÉ	Francisca	27680	フランス
39	31	FANJUL	Olvido		
40	32	FAU ESPAÑOL	Justina Julia	62477	アラゴン
41	33	FERON	Blanca	27400	フランス
42	34	FERRER	Concepción	43222	アラゴン

収容されたスペイン人女性リスト

生年月日	収容日	収容時の年齢	フランス滞在	収容理由	解放・死亡	備考
1925						
1910/10/30	1944/2/3	33	フランス人？			27000 輸送集団
1913/2/16	1944/7/29	31		レジスタンス	解放	
1928/4/28	1944/8/7	16	フランス在住		解放	
1894/12/24	1944/8/7	39	フランス在住		解放	
1914/9/7	1944/8/21	29			解放	
				レジスタンス	解放	
1918/4/15	1944/2/3	25	フランス在住		解放	27000 輸送集団
1907/12/3	1943/4/30	35			解放	
1921/2/25	1944/6/25	23			解放	
1904 年			フランス在住		解放	
1924/3/28	1944/6/22	20	フランス在住			
1911/7/28	1944/6/15	32			解放	
1915/1/26	1944/5/7	29			解放	夜と霧
不明						Buitrago は夫の姓
1915/12/28	1944/5/18	28	フランス在住		解放	1928 年にフランス国籍取得
1913/7/10						
1920/1/10	1944/2/3	24	フランス在住	政治	解放	27000 輸送集団
1919/6/27	1944/4/22	24			解放	家族は右派
					解放	
1915/6/15	1944/2/3	28		レジスタンス	解放	27000 輸送集団
				レジスタンス	解放	証言を拒否した？
1885/2/27	1944/5/18	59	フランス人			夫がスペイン人
1902/3/20	1943/12/16	41		政治／ユダヤ人	解放	スペイン系ユダヤ人
1932/4/9	1943/12/16	11		政治／ユダヤ人	解放	スペイン系ユダヤ人
1926/7/27	1943/12/16	17		政治／ユダヤ人	解放	スペイン系ユダヤ人
1908/2/11	1944/3/29	36		政治／ユダヤ人		スペイン系ユダヤ人
				レジスタンス	死亡	リースリングでガス殺？
		18		レジスタンス	死亡	リースリングでガス殺？
1916/4/19	1944/2/3	27		政治	解放	27000 輸送集団
1913/7/21	1944/2/3	30			解放	27000 輸送集団
1910/12/21	1944/2/3	33		レジスタンス	解放	27000 輸送集団
1913/2/2	1944/2/3	31		レジスタンス	解放	G.ド・ゴールの友人
1907/10/22	1944/5/18	36		政治	解放	
1905/3/11	1944/2/3	38		レジスタンス	解放	27000 輸送集団
					解放	内戦時にソ連へ
1894/9/26	1944/9/2	49			行方不明	
1914/4/27	1944/2/3	29	フランス在住？		解放	27000 輸送集団
1897/12/8	1944/6/14	46		政治	解放	

番号	Ref.	姓	名もしくは異名	収容者番号	出身地
43	35	FULVIÀ	Roser		カタルーニャ
44		FONT			
45	36	FOURNIER	Ana	47276	カナリアス
46	44	GARCÍA	Paquita (Fransquita la Gitana)	49697	
47	37	FREXEDES CULLÀ	Antonia	49696	カタルーニャ
48	38	FRUCTUOSO	Antonia	47303	アンダルシア
49		FUERTES	Carmen		
50	39	GALLART MARQUÉS	Laura (Kerwich)	27181	カタルーニャ
51	40	GARCIA	Carlota (CharlieJeantet-Charly Olaso)	21678	バスク
52	41	GARCIA AMANDA	Carmen	47304	マドリード
53	42	GARCÍA CHICHARRO	Nicolasa (Oliva, Nicolasa/Linares, María)	62483	バスク
54	43	GARCÏA ECHEVARRIETA	María Dolores	62461	フランス
55	45	GARDELL GARCÍA	Carme (BARTOLÍ)	27046	カタルーニャ
56	46	GARRIDO GRACIAS	Elisa (MME MASALLE/MASAOILLES/ELISA RUIZ)	27964	アラゴン
57	47	GASA	Felicidad (PORCAR)	39297	カタルーニャ
58	48	GASTÓN GANUZA	Demetria (DUPUY,Demetricia)		ナバーラ
59		GONZALEZ GUARDIOL	Josefina		
60	49	GRANGE(RAMOS)	Concha	62480	カタルーニャ
61	49	IBARZ	Elvira	62478	アラゴン
62	49	CASTELLÓ IBARZ	María	26275	
63	50	GUILLAUME	Dolores (VILLA, Dolores)	27303	カタルーニャ
64		HORTA			
65	51	HALZUET	Francisca (USANDIZAGA)	22463	ナバーラ
66	52	IRIBERRI	Anunciacion	57854	アストゥリアス
67	53	De la JARA	Amalice		
68	53	De la JARA	Sole (Fuente)		
69		JURADO	Agustina		
70	54	KLIONSKY	Rosa		リトアニア
71	54	KUGELMAN	Estrella (Stella)		ベルギー
72	55	LESBUR GERES	Jesusa		ナバーラ
73	56	LITMAN	Sofia		
74	57	LÓPEZ	Amalia (PERRAMON DUCAS, Sole)	27243	バレンシア
75	60	MARANGE BOBER	Maria	39240	カタルーニャ
76	59	MARANGE BOBER	Josefa (DELEUZE,Josefina)	39241	カタルーニャ
77	61	MARTÍNEZ	Ángeles (Angelines)	78232	フランス
78	62	MARTÍNEZ	Rita (PÉREZ)	27244	アストゥリアス
79	63	MARTÍNEZ PRIETO	Constanza	43224	マドリード
80	64	MARTORELL ROSALES	Herminia	31936	アラゴン
81	65	MATEOS	María	39196	カスティージャレオン
82	58	LUBIÁN CLEMENTE	María Pilar ("DE VITRY" MÉNDEX GORBEAULUBIAN)	39242	
83	66	MOLL	María	22415	カタルーニャ
84		MONEDER	Eugenia		
85	67	MONTHUIS	Anita	58044	マドリード
86		NEGRIN	Frania		

生年月日	収容日	収容時の年齢	フランス滞在	収容理由	解放・死亡	備考
				レジスタンス	解放	
				レジスタンス	死亡	
1906/12/31	1944/7/9	37			解放	
1927/8/22?				人種	解放？	
1913/9/13	1944/8/19	30			解放	
1912/2/14	1944/7/9	32			解放	
1896/12/2	1944/2/3	49			解放	27000 輸送集団
1899/1/8	1943/8/1	44			解放	夜と霧
1912/3/3	1944/7/29	32		レジスタンス	解放	
1905/1/12	1944/9/2	39		レジスタンス	解放	
1921/11/30			フランス在住？	レジスタンス	解放	夜と霧
1891/6/6	1944/2/3	52	フランス在住	レジスタンス	死亡	27000 輸送集団
1909/6/14	1944/2/3	34			解放	27000 輸送集団
1905/12/25	1944/5/18	38		レジスタンス	解放	
1907/12/22					解放	
				レジスタンス	殺害	
1925/8/6	1944/9/9	19		レジスタンス	解放	
1891/11/11	1944/8/28				解放	60　Concha の叔母
1914/1/6	1944/9/9	30			解放	61 Elvira の娘
1889/7/2	1944/2/3	54			解放	27000 輸送集団
				レジスタンス	死去	
1908/8/29	1943/9/2	35			死去	
1922/12/22	1944/8/21	21			解放	
	1943/2 月か 3 月				行方不明	
1900/2/19					行方不明	
1904/3/28	1943/12/16	39		政治・ユダヤ人	死去	71 Estrella の母親
1939/7/29	1943/12/16	4		政治・ユダヤ人	解放	
1917/1/4	1944/8/28	27			解放	
				レジスタンス	死去	
1909/8/10	1944/2/3	34			解放	27000 輸送集団
1920/8/4	1944/5/18	23		政治	解放	
1915/2/18	1944/5/18	29		レジスタンス	解放	夫はフランス人
1919/12/5	1942/5/29	22	フランス在住	スペイン人の赤	解放	最初の収容者
1894/7/2	1944/1/1?	49		レジスタンス	解放	
1917/1/16	1944/6/14	27		政治	解放	
1903/1/5	1944/3/16	41			解放	
1918/4/14	1944/5/18	26			解放	
1909/5/10 ,1916?	1944/5/18	28 か 36	1909/5/10	政治	解放	
1920/7/20	1943/9/2	23			解放	
				レジスタンス		
1918/9/2	1944/8/22	25		レジスタンス	不明	

番号	Ref.	姓	名もしくは異名	収容者番号	出身地
87		NICOLAS	María Josefa		バスク
88	68	NÚÑEZ TARGA	Mercedes	43225	カタルーニャ
89		OUCHENE	Danielle	39246	
90	69	PALOMA	Josefina (Josette)		カタルーニャ
91		Paloma Josette の母親			カタルーニャ
92	70	PINTOS NAVAS	Feliciana (BIERGE)		アラゴン
93		PASTOR			
94		POMARES	Marita		
95		PUIG	Francisca	43225	カタルーニャ
96	71	REVIRE	Lidia	35453	カタルーニャ
97	72	RICOL LÓPEZ	Lisa (Lise LONDON)	42171	フランス
98	73	RODA	Ana		
99		ROMERO	Ascension		
100	74	ROQUÉS RODRÍGUEZ	María	27973	アストゥリアス
101	75	RUBIANO FERNÁNDEZ	María Leonor	78246	マドリード
102	76	SANTOS	María	62484	
103		RUPERT	Aida		マドリード
104		SABATER	María		バスク
105	77	SANZBERRO	María Josefa (NICOLÁS)	62462	バスク
106	78	SERÓS	Coloma	27037	カタルーニャ
107	79	SERRANO	Carmen		
108		SERRES	Jeanne		
109	80	De SILVA	Rosita	85473	フランス
110	81	SOLDEVILLA	Germania	62475	カタルーニャ
111		SOLSONIA	Blanca	21701	
112	82	SOTO	Rosa（La Asturiana）		アストゥリアス
113	83	TAPIA ESTEBAN	Milagros (Mimi)		アラゴン
114	84	TOMAS JURADO	Agustina (TOMÁS CHALER,Patrocinio)	19350	
115	85	URQUIZA PALACIOS	Daría		リオハ
116	85	ROMERO URQUIZA	María Luisa		バスク
117	86	VAN AAL	María del Carmen(Marita)	57706	バレンシア
118		VELÁZQUEZ	María del Piar	42150	フランス
119	87	VAZQUEZ	María del Pilar (PILUCA/María de Burdeos)		フランス
120		VELATA	María		アラゴン
121	88	WINTER	Anita		マドリッド
122	89	ZAPATER AQUILERA	Carmen	49676	アンダルシア
123	90	ZILBERGBERG	Estucha		ポーランド

ラーフェンスブリュック抑留者協会ホームページ掲載のリスト
http://www.depardocreative.com/web_censo/censo_deportadas.html（最終アクセス 2012 年 12 月 10 日　現在はアクセス不可能）及び
Amics de Ravensbrück, *Memorial de las españolas deportadas a Ravensbrück*, Barcelona, 2012, pp.132-135　に掲載の表を元に一部改編して作製。

生年月日	収容日	収容時の年齢	フランス滞在	収容理由	解放・死亡	備考
1895/9/22	1944/8/29	48			死去	
1911/1/16	1944/6/25	33		レジスタンス	解放	
1922/2/28	1944/5/18	22		レジスタンス		
					ガス室で死亡	
					ガス室で死亡	
1914/6/9	1945/3/7	30			解放	
				レジスタンス	解放？	117 と同一人物？
1914/4/17	1944/6/23	30		政治	解放？	88 と同一人物？
1906/5/12	1944/4/22	37			解放	
1916/2/15	1944/6/15	28		レジスタンス	解放	
					解放	証言を拒否
1895/3/10	1944/2/3	48			解放	27000 輸送集団
1920/7/3					死亡	77 A.Martínez の友人
1903/9/17	1944/8/28	40			解放	
1903/9/17	1944/8/28	40				
1895/9/22	1944/9/2				死亡	
1914/7/9	1944/2/3	29			解放	27000 輸送集団
1926/7/27					解放	夜と霧
1910/4/19	1944/8/28	34			解放	
1895/7/28	1943/9/1	48				
1920/5/20	1944/8/28	24			絞首刑	
1922/12/2	1943/4/30	20			解放	
1896/10/25					解放	
1925 末					解放	
1907/7/8					脱走	夫はベルギー人、Marta Pomares?
1926/10/2	1944/6/5	17		政治		119 と同一人物？
1914/1/6				レジスタンス	解放	Concha GRANGE は従姉妹、Elvira の娘
1918/9/2						
1912/5/30	1944/8/7	32			解放	
	1944/1/1				解放	

本論文は人文科学研究所共同研究『移民・移住を通じて支配と服従の関係を考える』（2011～2013 年度）の成果の一部である。